

エックハルトの〈アイデア—インテリゲンチア〉 連関

— 『創世記』のアイデア論的解釈を中心として —

高橋 淳 友

1 問題の所在

マイスター・エックハルトのドイツ語の論述『離脱について (*Von abegescheidenheit*)』¹⁾には、「アヴィケンナという師」が「離脱した精神 (*geist*) の高貴さ」について述べているという記述 (DW V, SS. 410-411) がある。同書の冒頭でエックハルトは、「神が被造物を造る前、人が神の中にあったとき、それにおいて人と神の間にまったく差異がなかった像に (*dem bilde*)」, 「それをもってすれば人が最も等しい (*aller glîchest*) 状態となる最高最善の徳」とは何か、ひたすら求め (DW V, SS. 400-401), 多くの書を渉猟した結果、かの「最高最善の徳」が離脱であるという結論に至ったと述べているので (DW V, S. 401), 渉猟された書のなかにあったアヴィケンナの見解²⁾, 恐らく“*geist*”等に関わる見解を離脱として捉えているのだと思われる。ではそれは何であろうか。

離脱として捉えうるということは、離脱として示されている在り方と類似している点があると推察されるので、この点を基に考えるなら、エックハルトの念頭にあったのは、*intelligentia agens* (能動知性体) との「結合」についての見解であったと思われる³⁾。例えば『靈魂論』でアヴィケンナは、魂がそれにより、「叡智的な美」と「永続的な喜び」を見出すとされている、「身体と身体から付帯することから自由になった魂」と *intelligentia agens* との結合について触れているが⁴⁾, 『離脱について』でもこれと重なる在り方が、「完全な離脱の状態にある人」の在り方として述べられている。すなわち彼は、「永遠の

うちへと連れ去られ]、「いかなる無常のものにも動じない」し「身体的ないかなるものも感受しない」(DW V, S. 411) とされている。

だが以上のように考えた場合、次の点が問題となる。例えばアヴィケンナの *intelligentia agens* は、トマス・アクィナスの言葉⁵⁾を援用すれば、「最下位のインテリゲンチア (知性体)」で、分離実体ではあるが神ではない。したがって、それを離脱に関係付けるためには、「像」、つまり「神におけるイデア (Idee)」⁶⁾と連関するよう、神における何かとして捉え直す必要があったと考えられる。本稿の目的は、こうした〈イデアーインテリゲンチア〉連関を可能にする捉え直しの点から、エックハルトのインテリゲンチア論を検討することにある。しかし、『離脱について』ではこの点については詳述されていない。そこで本稿では、『創世記注解 (*Expositio libri Genesis*)』⁷⁾をテキストとして取り上げ、同書で引用されている、モーゼス・マイモニデスの『迷えるものの手引 (*Dux neutrorum*)』⁸⁾、そして無名氏の『原因論 (*Liber de causis*)』⁹⁾における、天使、分離実体としてのインテリゲンチアに対するエックハルトの言及を検討する。前者からは *intelligentia agens* を含めたインテリゲンチアの捉え直しを、そうして後者からは、そのインテリゲンチアの〈始め〉——神が天と地を創造したという〈始め (principium)〉——への収斂を考慮すべき点として取り上げ、〈イデアーインテリゲンチア〉連関に対するエックハルトの見解をあきらかにしてゆく。

2 マイモニデスにおける〈イデアーインテリゲンチア〉

エックハルトが『創世記注解』で、本稿で取り上げる、「ラビのモーゼス (Rabbi Moyses)」への言及を行っているのは、「我々は人間を我々に象り (imago) 似せて (similitudo) 造ろう」という『創世記』の章句に対する注解部分 (115-120 節) のなかにおいてである (n. 115-120, LW I, SS. 270-276)。

116 節によると、上記の章句が、「我々は造ろう (faciamus)」と複数になっている点について、マイモニデスは、それを、「賢人たち」が解釈するように、次の言葉、「創造主が何かを造るのは、それをく上天の集会 (coetus super-

ior)〉で見るそのかぎりにおいてである」と関連させて説明している (LW I, S. 273)。マイモニデスは、「創造主」が「天使たち」を媒介にして業を行う (LW I, S. 273) という点から、天使を含めることで、複数となっていることを解釈しているのである。

このような「集会」についての言及は、117節におけるマイモニデスからの引用にも見られる。117節の引用によると、マイモニデスは、次のような言葉、すなわち、「創造主は〈上天の集会〉と協議 (consilium) を持たないかぎり何も為さない」、「神自身と彼の〈集会〉は、人間におけるどの肢体についても会谈し、それをその構成のうちに置いた」という「賢人たち」の言葉 (LW I, S. 273) について、それは、「存在者の個々のものと動物のすべての肢体は (singularia entium et omnia membra animalium)」、「[それらのもの] であることに応じて (secundum quod sunt) 天使が介在することで存在している (sunt quidem mediantibus angelis)」ということだと述べているとされる (LW I, S. 274)。

「我々」のうちに天使たちを想定する見解自体は、そもそもヘブライ語の「エロヒム」が複数形であること¹⁰⁾、そしてマイモニデスが言うように、神にも天使にも“elohim”という名称が用いられる¹¹⁾ことに留意するなら、ユダヤ思想的には特に異とするにはあたらないともいえるが、116節によれば、マイモニデスは、「我々によると天使たち」であるものとは、「アリストテレスによればインテリゲンチアたち」のことだと捉えているのである (LW I, S. 273)。そして、これら「創造主とそれ以外の存在者の間に介在するものたち」は、事物の生成の原因である天体の運動に関与するものとされている (LW I, S. 273)。インテリゲンチアとしての天使も含めた「我々」が、「造る」ものとして捉えられているのは、この故もあってである。天使という名称自体は、『迷えるものの手引』によると、様々な事例において用いられるものであるが¹²⁾、インテリゲンチアと結び付けられているのは、「物体ではない (non sunt corpora)」ものとしての天使であり、これは、アリストテレスの言う「分離知性たち (intellectus abstracti)」、あるいは「分離したインテリゲンチ

アたち (*intelligentiae abstractae*)」——すなわち「分離したアクル ('aql) たち」¹³⁾——とは、「ただ名前においての違いしかない」とされている¹⁴⁾。

アルベルトゥス・マグヌスが、インテリゲンチアの位階 (*ordines*) と天使たちの位階を同一視した者たちの一人としてマイモニデスを挙げている¹⁵⁾のも、上記のような記述からだと思われるが、マイモニデスによって天使に比されるべきものとして語られているのは、アリストテレス的インテリゲンチアだけではない。マイモニデスは、116 節によると、「創造主が〈上天の集会〉を見る」ということを、次のようなプラトンの言説に結び付けて捉えているとされる。

プラトンが同じようにこう述べたということを見るがいい。彼は、創造主は叡智の世界で見てそれから存在者を産出するのだと言っている (*vide quod Plato locutus est similiter dicens quod creator videt in saeculo intellectuali et ex ipso producit entia*) (LW I, S. 273)¹⁶⁾。

上記引用中の「叡智的世界」とは、「インテリゲンチアの世界」¹⁷⁾である。非物体的存在者である天使の一群による〈上天の集会〉は、非物体的なインテリゲンチアの世界に相当するものとして捉えられた上で、「創造主が〈上天の集会〉を見ること」と、プラトンの言葉は「同じように」と述べられているわけである。

3 「叡智的世界」は〈どこに〉あるのか

プラトンが、どの著作においてこのような発言をしているのかについては、エックハルトが引用するマイモニデスは特に言及していない。だが、中世西洋においてよく読まれたプラトンの著作が、カルキディウスによる注解つきのラテン語訳『ティマイオス』であるということからして、少なくとも引用者であるエックハルトは、上記のプラトンの言説を、『ティマイオス』で語られる、デミウルゴスといわゆるイデアに結び付け¹⁸⁾、天使でもあるインテリゲンチアがイデアに、創造主つまり神がデミウルゴスに位置付けられていると受け取っ

たはずである。また、エックハルトの引用に該当する個所の続きを、『迷えるものの手引』で見てゆくと、マイモニデスは、「すべての形相 (omnes formae)」がそれに由来する *intelligentia agens* も天使のなかに入れて¹⁹⁾ ので、〈上天の集会〉、造る「我々」のなかには、*intelligentia agens* も含まれるとエックハルトは考えたはずである。

だがこのように位置付ける場合、イデアとインテリゲンチア——*intelligentia agens* も含めた——との連関は、『離脱について』で示唆されていたような、神におけるそれではないことになる。上記の、いわば神々とでも呼びうる、イデアであるインテリゲンチアたち——ちょうど中世において、プラトンやプラトン主義者たちが主張したとされた、「分離形相」²⁰⁾ のようなそれ——によって構成される世界を想定することは、イデアであるインテリゲンチアたちの〈場〉、つまり〈イデア—インテリゲンチア〉連関の〈在処〉を、神とは別の「叡智的世界」とすることになる²¹⁾。

しかし『創世記注解』では、イデアは神においてあるものとして捉えられており、マイモニデスに対する言及に先立つ 115 節でも、エックハルトは、イデアについてこのように述べているのである。すなわち、理性的ないし知性的被造物以外のものは、神の内にあるものに似ており、自己に固有なイデアを神の内²²⁾に有する (LW I, S. 270) が、理性的ないし知性的被造物の場合、その知的本性は、「神の内のイデア的な何か」というよりも、他ならぬ「神」そのものに似ているのだという (LW I, S. 270)。

したがってエックハルトにとって、事物が「似せて造られる」イデアは、神とは別に、一群の分離実体として叡智的世界においてあるわけではない。イデアを神におけるものとしているエックハルトは、むしろ、インテリゲンチアの世界もまた、神におけるものとして捉えようとしている。というのも彼は、以下で示すように、マイモニデスにより「叡智的世界」として位置付けられた〈上天の集会〉を、神におけるものとして捉えようとする姿勢——つまり、『離脱について』で示唆されていた、「能動知性体」に対するような姿勢——を取っているからである。そしてこのような姿勢を彼が取るのは、イデアと関わる

インテリゲンチアを、神におけるものとして考える、つまり、〈イデア—インテリゲンチア〉 連関の〈在処〉を、神において考える立場からだと思われる。

例えばエックハルトは 119 節で、「創造主は、それを〈上天の集会〉で見ながら造る」、**「神と彼の〈集会〉は、人間におけるどの肢体についても会談し、それをその構成のうちに置いた」という言葉を「真である (verum est)」と述べている (LW I, S. 274)**。その理由を彼は、「世界の本質的で主要かつ枢要な部分の最適な一致、そして合致に則して」、神は、「存在者」や「動物の肢体に属する」何に対してであれ、「働きかける」からだとしている (LW I, S. 274)。この説明のためにエックハルトは、家を造ろうとして、尺度や形を意図し、材料を選び取る大工 (domificator) の在り方 (LW I, SS. 274-275) を例としてあげている。エックハルトはまた、77 節で、「職人の精神における (in mente artificis) 家」について述べているので (LW I, S. 239)、大工の例を用いた説明において、彼が、〈上天の集会〉を 神の精神の内部に組み込み、神の精神の活動——大工が内なる家に則して様々に思案するような在り方——と関連付けていることは明らかである。そして、精神の活動との関連付けという点から、重要であるのは、〈上天の集会〉という語自体よりも、マイモニデスが、〈上天の集会〉を構成する天使と重ね合わせている、インテリゲンチアの位置付けにあることが推測できる。

トマス・アクィナスは、インテリゲンチアが、アラビア語からの翻訳書では、「分離実体」である「天使」を意味していることを承知しつつも、「知性認識である《知性の現実態》自体を (ipsum actum intellectus qui est intelligere) 示すもの」(『神学大全』)²²⁾と述べている。いわばトマスのようにエックハルトも、インテリゲンチアが天使とされていることを知りつつ、ラテン語訳されたアリストテレスの著作で言われているインテリゲンチア、「原理」と「形相」に端を発する“motus”としてのそのように(『形而上学』)²³⁾、インテリゲンチアを、まさに、大工の精神の家のような、内なる範型——つまりこの場合はイデア——に関わる知性の“動”，つまり、知性認識といった現実に働いている知性の在り方として解釈しているといつてよい。彼はその解釈をもってして、

〈上天の集会〉を、神の内にあるものとして言及していると考えられる。

4 〈始め〉における〈イデアーインテリゲンチア〉

マイモニデスが神とは別のインテリゲンチアの世界を含めることで、「似せて造る」ものの複数性を説明するのは、神における多性の否定による²⁴⁾とも思われるが、これに対して、神においては、「その単一性に多の知性認識は (intelligere plura) 背反しない」(n. 11, LW I, S. 195) と考えるエックハルトにとって、「似せて造る」インテリゲンチアは、引用しているマイモニデスがそれを天使としていたとしても、神へと収斂させて解釈されて然るべきものである。

『創世記注解』では、この収斂が向かう先はまた、以下で示してゆくように、「創世記」で語られている、神が「天地」を「創造」したというその〈始め (principium)〉でもある。しかしこの〈始め〉は、被造世界のなかの時間的な意味でのそれではなく、イデアと結び付いて言及されていることから分かるように、『離脱について』の冒頭で言われていた「神が被造物を造る前」に相当する、といてよい。

〈始め〉におけるイデアについてエックハルトは、『創世記注解』の冒頭近く (n. 3, LW I, SS. 186-187) で次のように述べている。彼はここで、天地創造の〈始め〉を“ratio idealis”とした上で、〈始め〉という語に基づいて、「創世記」の〈天地創造〉と「ヨハネ福音書」の一節「〈始め〉に〈言葉〉があった」の〈言葉〉を関連付ける。さらにその〈言葉〉について「ヨハネ福音書」で言われている、「すべてのものはそれによって生じたのであって、それなしで生じたものはなにもない」という章句から、〈始め〉の〈言葉〉と、「すべてのものの知らびに存在の諸始原 (principia)」としてのプラトンの「諸事物」の「ラチオ」、「イデア」を関連付けている。またエックハルトによると (n. 77, LW I, S. 238)、被造物は“rerum natura (事物界)”における「エッセ」の他に、「それらの本源的な諸原因」、「少なくとも〈神の言葉〉」において、「確固として永続的なエッセ (esse firmum et stabile)」を有しているとされる

ので、上記の〈始め〉、〈神の言葉〉において、事物はアイデアとして、まさに「確固として永続的なエッセ」を有するといつてよいだろう。

そしてインテリゲンチアもまた、このような〈始め〉に対して関わるものとしてある。以下の引用からすると、“ratio idealis”である〈始め〉とは、エックハルトによれば神の「知性」ということになり、インテリゲンチアもそれとの関わりで語られているからである。

それにおいて「神が天と地を創造した」〈始め〉は、知性の“natura” (natura intellectus) である。「詩篇」[にこうある]、「知性において諸天を造った方」。実際、知性は全“natura”の“principium”である (Intellectus enim principium est totius naturae)。ちょうど『原因論』の第9命題における注解で、以下の言葉のもと、言われているようにである。「インテリゲンチアは神的な力により“natura”を統御する」、そしてさらに、「インテリゲンチアは、生成物，“natura”，“natura”の境を把握する」。そして、後でこう帰結する。「それゆえ、インテリゲンチアはすべてのものを包含する」。かくてそれ故〔神は〕「始めに」、すなわち知性において「天と地を創造した」のである (n. 6, LW I, S. 189)。

先に見たように、〈始め〉における〈神の言葉〉において、事物はアイデアとして、「確固として永続的なエッセ」を有するのだとすると、神が〈始め〉において「創造」したこの「天地」は、この「確固として永続的なエッセ」を、アイデアとして〈始め〉において、つまり「知性の“natura”」において——これは、“rerum natura”に対して、いわばアイデアとしてもものがある“natura (界)”と考えてよいだろう——有しているといえる。この「確固として永続的なエッセ」を説明するにあたって、77節でエックハルトにより用いられているのが、先にも触れた、「職人の精神における家」の例なのだが、この例に基づいて考えるなら、この「確固として永続的なエッセ」は、神の知性の活動(インテリゲンチア)におけるものだといつてよい。

エックハルトは、「質料における家が形相的存在を外で受け取る」前、職人の精神において「認識され知られる」在り方に喩えることで、この「確固として永続的なエッセ」を説明しようとしている (n. 77, LW I, S. 239)。この場合、職人が造ろうとする家を認識し知ることが、彼の精神に家が現にあることになる。したがって、「確固として永続的な」かたちで、事物がイデアとして、神の知性である〈始め〉においてあるということ——例えば「天地」のように——、それは、神が認識すること (インテリゲンチア) としてある、ということである。これはまた、認識において在らしめることだともいえるので、上記の「天地」のように、「創造」として語ることも出来るだろう。なおトマスは、天使がインテリゲンチアと呼ばれる理由として、それが常に現実態において知性認識するものだからではないかと考えているが²⁵⁾、このように、いわば存在する仕方をもってして、天使がインテリゲンチアと呼ばれうるのだとするなら、上述してきたイデアも、「確固として永続的な」かたちで、常に現実態において神の知性の活動として「ある」という点で、インテリゲンチアといえることができるだろう²⁶⁾。つまりこの場合の〈イデアーインテリゲンチア〉連関とは、神を〈場〉とするイデアがインテリゲンチアとしてある、ということとなる。

ところで、このようなインテリゲンチアを語るにあたってエックハルトは、『原因論』を引用している。確かに『原因論』においても、インテリゲンチアが知性の活動のような意味合いで使われている場合もある²⁷⁾。しかし『原因論』中の、エックハルトが引用しているような個所に見られるインテリゲンチア、「アキリ (achili)」、「アルアキリ (alachili)」（つまり 'aql に由来する）²⁸⁾ などとも呼ばれるそれは、「生成物」、「natura」—— Brand によれば “the sensible universe”²⁹⁾——、そして“natura”の境、つまり魂³⁰⁾を「把握する」ものだとしても、第一原因より下位の被造物とされるものであり³¹⁾、天使として解釈されるもの³²⁾である。引用者であるエックハルトも当然、『原因論』でのインテリゲンチアの位置付けについては承知していたはずである。だが彼は、『原因論』を踏まえつつも、マイモニデスに対した場合と同じように、天使がそうであるような意味での被造物としてではなく、〈始め〉において「創

造」をする神の知性の在り方としてインテリゲンチアを語るのである。

先に、多としてのインテリゲンチアの神への収斂について述べた。この〈始め〉、つまり“ratio idealis”におけるインテリゲンチアも、次のようなエックハルトの言葉、「産出者である神そのもの (deus ipse producens)」は、「存在、生、知性認識、働きにおいて単一なる〈一者〉あるいは〈一〉であるが、“rationes ideales”と言う点で豊饒極まりない (copiosius)」（n. 12, LW I, SS. 195-196）のなかにある，“rationes ideales”の豊饒さという点からして、やはり多としてのものでもある。〈始め〉、つまり“ratio idealis”にあつて「産出者」たる神の知性認識は一なるものであつても、そのうちには、個々の事物の「知性認識 (インテリゲンチア)」が含まれることになり，“rationes ideales”という点で豊饒極まりないものとなる。

5 理性的魂とその「完成」としての「観智的世界となること」

『離脱について』において、「像 (=イデア)」との連関が示唆されていた、能動知性体 (intelligentia agens) も、以上述べてきた『迷えるものの手引き』、『原因論』のインテリゲンチアと同じように、イデアに関わる知性の活動、知性認識として、〈イデアの在処〉たる神へと収斂する形で解釈されたそれと捉えてよいだろう。そして先に述べたように、インテリゲンチアが多としてのものでもあり、特に、『離脱について』では、人間の「像」が言及されていたことからすると、『離脱について』において示唆されているインテリゲンチアとは、まず、人間のイデアという点でのインテリゲンチアとして説明することが可能だろう。

では、この〈イデアーインテリゲンチア〉連関から、離脱を考えた場合、どのように述べる事が出来るだろうか。冒頭で述べたように、離脱とは神のうちにある「像」と最も等しい状態になる「最高最善の徳」である。だがまたこの「最高最善の徳」とは、それをもってすれば、人間が、とりわけ最も近く神と結び付きうる (DW V, SS. 400-401) 徳でもある。それゆえ離脱とは、それにおいて人と神の間にまったく差異がないという人間の「像」と等しい状態

となることで、神と一致することだといえるだろうが、これは〈イデア—インテリゲンチア〉 連関の観点からすると、人間が、〈始め〉にイデアとしてあった在り方に還帰し、〈始め〉において人間のイデアに関わる神のインテリゲンチア——「豊饒さ」のなかのものとしてのそれ——と一致し、〈始め〉において世界を「創造」する神の知性の活動そのもの——単一なる一者としてのインテリゲンチア——と一致することだといってよいだろう。

なお、今回取り上げた『創世記注解』でも、このような形で至る神との一致が、やはり“アヴィケンナという師”の言葉の引用により示されているように思われる。エックハルトは、先に触れた (n. 115)、理性的ないし知性的被造物の場合、その知的本性が神そのものに似ているということに関連して、アヴィケンナの『形而上学』（9巻7章）から、「理性的魂」の「完成」に関する引用を行っている (n. 115, LW I, SS. 270-271)。その「完成」とは、引用によると、「叡智の世界となる (fiat saeculum intellectuale)」こと、「すべてのものの形相がその〔魂の〕うちに描き出されるようになる」こと、しかも、「その〔魂の〕内で、全世界 (universitas) の存在の配置が完成され」て、「全世界の存在の似姿 (instar)」, 「叡智的世界へと (in saeculum intellectum) 移行する」に至るまでそうなること、というものである。

エックハルトはこれを引用をするにあたって、人間は「神から」「神の実質 (substantiae) 似姿 (similitudo) へと」進むということに結び付けている (LW I, S. 271)。というのも、彼に言わせると、「知的本性」のみが、上記の「神の本質」——つまり、「知、知恵、監督、存在者の配置と他の被造物への摂理と統率」——の「実質的完成に (perfectionum substantialium)」 「適している (capax)」からである (LW I, S. 271)。このように述べる事が出来るのは、エックハルトが、「理性的魂の完成」という点で言及されている、すべてのものの形相の描出、世界の存在の配置云々を、「神的本質」の在り方に結び付けて理解しているからだといってよい。これはまた、先に見た、〈始め〉における神の知性の活動と重なる在り方といえるだろう。エックハルトは、「叡智的世界になる」という「理性的魂」の完成を、そうした〈始め〉におけ

る神の知性の活動との一致に見出しているのである。そして離脱も、先の〈アイデアインテリゲンチア〉連関から考えた場合、このような在り方を志向するものだといえるだろう。

知的被造物である人間は「知的本性」という点で神に似ている。先に見たように、職人や大工の例が神の在り方の説明に用いられるのもその故であろう。しかしエックハルトは、さらに「進む」あるいは「移行する」在り方、つまり、世界創造以前、「始め」において活動していた神の知性の活動（インテリゲンチア）そのものへと至り得る動性を「知的本性」に見出している。〈アイデアインテリゲンチア〉連関の点から言えば、そのような在り方へと「進みうる」ものとして、人間を神はアイデアという点で「知っている」ということになるだろうが、しかし〈始め〉の在り方、「叡智的世界」となった在り方は、世界創造後の被造物として、“*rerum natura*”内に存在する人間の知的能力では、それ自体としては当然把握することはできない。ちょうど、『離脱について』で、離脱が極まると、「認識から認識なきもの」に、そして「光から闇になる」（DW V, S. 428）といわれているように、把握できないものなのである。

注

- 1) エックハルトの『離脱について』のテキストとしては、*Meister Eckhart, Die deutschen Werke*, Bd. V (Stuttgart, 1963, 1987). を使用した (DW V と略記)。
- 2) DW V の注では (S. 445), “*Avicenna Liber sextus Nat. Pars 4 c. 4, Ed. Veneta 1508 f. 20vb*” があげられている。
- 3) アラン・ド・リベラ (『中世哲学史』阿部一智, 永野潤, 永野拓也訳, 新評論, 1999) に即するなら, 「取得知性」についての見解ということになるだろう (同書 496-497 頁)。
- 4) *Avicenna Latinus. Liber de Anima IV-V*, édition critique par S. van. Riet, introduction doctrinale par G. Verbeke (Louvain-Leiden, 1968), p. 150 (quinta pars, capitulum sextum)。
- 5) R. McInerny, *Aquinas against the Averroists. On There Being Only One Intellect* (West Lafayette, 1993), p. 140 (PART TWO, Text)。
- 6) E. Schaefer, *Meister Eckeharts Traktat „Von Abegescheidenheit“*. *Untersuchung und Textneuausgabe* (Bonn, 1956), S. 191 (Kommentar, 1)。

7) エックハルトの『創世記註解』のテキストとしては、*Meister Eckhart, Die lateinischen Werke*, Bd. I (Stuttgart, 1938-1965) を使用した (LW I と略記)。

8) 本稿では、以下の『迷えるものの手引』を参照した。

アラビア語版

Le Guide des Égarés; 3 vols (Paris 1856-66, Osnabrück, 1964). S. Munk によるアラビア語テキスト部分。

ラテン語訳版

(1) *Moses Maimonides Parisiis 1520*, ed. Augustinus Justinianus (Frankfurt a. M. 1964, unveränderter Nachdruck). なお、LW I で『迷えるものの手引 (*Dux neutrorum*)』のテキストとしてあげられているのは、この1520年版である (LW I. S. 752)。引用にあたっては fo. の番号と共に行数も示したが、行を数えるにあたっては、Capitulum のタイトル部分も含めた。

(2) Joh. Buxtorf, *Rabbi Mosis Majemonidis liber Doctor Perplexorum* (Basel 1629, Nachdruck 1969). Buxtorf のこのラテン語版は、Samuel Ibn Tibbon のヘブライ語訳版に基づくものであるという。W. Kluxen, “Literargeschichtliches zum lateinischen Moses Maimonides”, in *Recherches de Théologie Ancienne et Médiévale* 21 (1954), pp. 23-50 (p. 24).

英訳版

Moses Maimonides, *The Guide of the Perplexed*, translated with an introduction and notes by S. Pines. vol. I, vol. II (Chicago and London, 1963). vol. I の序文によると、S. Munk のテキストに基づくものである。

9) 『原因論』、『中世哲学叢書II 原因論 聖トマス・デ・アクイノ原因論註解』、ヴェンサン・マリー・プリオット、大鹿一正共訳 (聖トマス学院, 昭和42年) 所収。

10) 旧約聖書で神が複数で表現される場合がある理由については、例えば、米倉充『創世記 旧約聖書入門』(人文書院, 1984年) 30頁を参照されたい。

11) 『創世記注解』には、次のようなマイモニデスからの引用がある (n. 202, LW I, S. 350). “*elohim aequivocum est deo et angelis et iudicibus habentibus ducatum in villis*”. 前掲 *Moses Maimonides Parisiis 1520* でこの引用に当該する箇所は、fo. V (v.), 17にある。なお Koch によると、エックハルトはマイモニデスから、*Elohim*, *Schaday* といった神名についての説明を受け継いでいるという。J. Koch, “*Meister Eckhart und die jüdische Religionsphilosophie des Mittelalters*”, in *Jahres-Bericht der Schlesischen Gesellschaft für vaterländische Cultur* 101 (1929), SS. 134-148 (S. 139).

12) 例えば、前掲 *Moses Maimonides Parisiis 1520*, fo. XLIII (v.), 46-47 を参照されたい。

13) 前掲 *Le Guide des Égarés*. vol. II. アラビア語テキスト部分 16葉 19行目。

14) 前掲 *Moses Maimonides Parisiis 1520*, fo. XLIII (r.), 24-28.

- 15) Albertus Magnus, *De causis et processu universitatis a prima causa*, Lib. I, Tract. 4, Cap. 8, in *Alberti Magni Opera Omnia*, Tomus XVII, Pars II (Aschendorf, 1993), S. 58.
- 16) エックハルトの引用では、プラトンの名前が挙げられているが、前掲 *Moses Maimonides Parisiis 1520* では、“Sed vide quod populo locutus est similiter Dominus, quod Creator videt in seculo intelligibili: et ex ipso producit entia” となっている (fo. XLIII (r.), 42-43)。しかし、前掲 *Le Guide des Égarés* vol. II (アラビア語テキスト部分 16 葉 (裏) 23 行目) では、「プラトン」の発言となっている。また、前掲 Joh. Buxtorf, *Rabbi Mosis Majemonidis liber Doctor Perplexorum* でも (p. 201), “ait Plato” とプラトンの名前が挙げられている。
- 17) 前掲 Joh. Buxtorf, *Rabbi Mosis Majemonidis liber Doctor Perplexorum* では、「プラトンの言葉」は、“Deus inspiciat in Mundum Intelligentiarum et ex illo producat Entia” となっている (p. 201)。
- 18) マイモニデスの挙げているプラトンについて、LW I, S. 273, 脚注 2 には、“Cf. PLATO *Timaeus* CHALCIDIO interprete 28 A (23, 17-24, 4)” とある。また、Pines の指摘も参照されたい (*The Guide of the Perplexed*, vol. I, lxxv-lxxvi)。
- 19) 前掲, *Maimonides Parisiis 1520*, fo. XLIII (v.), 6-7.
- 20) 『聖トマス・デ・アクイノ原因論註解』, 前掲『中世哲学叢書 II』18-19 頁 (命題三) を参照されたい。
- 21) 例えばイブン=ハルドゥーンは、哲学者たちにとって、「能動的知性」とは、「感覚の被幕が除去されている最高段階の精神界を意味する」と述べているが (森本公誠訳『歴史序説』岩波文庫版(4) 46 頁, 岩波書店, 2001), 上記のように「形相」の付与者とされた場合, 能動知性体自体, 見方によっては, イデアの〈在処〉たる睿智の世界ということになるともいえるだろう。
- 22) *S. Thomae Aquinatis Summa Theologiae*, cura et studio Petri Caramello, Pars Prima et Prima Secundae (Torino-Roma, Marietti, 1952), I, q. 79, a. 10, resp..
- 23) *S. Thomae Aquinatis in duodecim libros Metaphysicorum Aristotelis Expositio*, ed. M. R. Cathala et R. M. Spiazzi (Torino-Roma, Marietti, 1950), p. 341 (Textus Aristotelis, Caput VII, 605-607).
- 24) Giles of Rome, *Errores Philosophorum*, critical text with notes and introduction by J. Koch, English translation by J. O. Riedl (Milwaukee, 1944), p. 58; p. 64.
- 25) 前掲 *S. Thomae Aquinatis Summa Theologiae*, I, q. 79, a. 10, resp.
- 26) 「神の思惟」をイデアとする見解については、例えば、熊田陽一郎『プラトニズムの水脈』(世界書院, 1996 年), 第一部第一章を参照されたい。
- 27) 『原因論』, 前掲『中世哲学叢書 II』60 頁 (命題五 (六), 61)。また, *The Book of Causes [Liber de Causis]*, translated by D. J. Brand (Milwaukee, 1981, 1984) の

“intelligence” についての注 (18, p. 47) も参照されたい。

- 28) 『原因論』, 前掲『中世哲学叢書II』55頁 (命題四, 43), 57頁 (命題 (五), 52).
また同 55 頁, 注の t を参照されたい。
- 29) 前掲, *The Book of Causes [Liber de Causis]*, p. 11 (Translator's Introduction).
- 30) 『原因論』, 前掲『中世哲学叢書II』68頁 (命題八 (九), 84).
- 31) 『原因論』, 前掲『中世哲学叢書II』55頁 (命題四, 43).
- 32) 前掲, *The Book of Causes [Liber de Causis]*, p. 11 (Translator's Introduction).